

國學院大學學術情報リポジトリ

〔座談会〕 神道文化学部開設二十年を迎えて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000012

〔座談会〕

神道文化学部開設二十年を迎えて

◆ 國學院大學若木タワー十七階 神道文化学部長室
◆ 令和四年八月三日（水）午後一時

西岡 和彦（本学教授）
石井 研士（本学教授）
武田 秀章（本学教授）
黒崎 浩行（本学教授）
笹生 衛（本学教授）
（司会） 鈴木 聡子（本学助教）

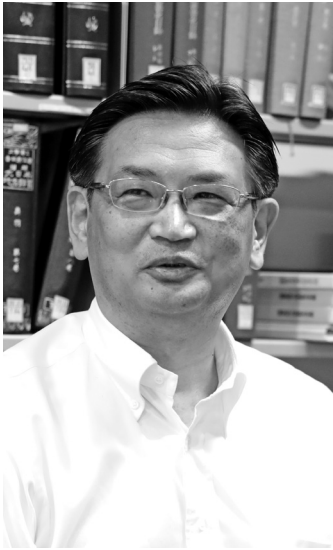
鈴木 『國學院雑誌』では、これまで神道文化学部の開設時と十周年と、それぞれ座談会が組まれております。今年度、二十周年を迎え、再び座談会を開催することとなりました。今回の目的としては、この十年間の出来事とともに開設から二十

年というスパンでも様々な時代の流れがありましたので、そういったことも含めてお話しいただければと思っております。ご参加の先生方は、現在、本学部にも所属していらっしゃる学部長・副学部長経験者です。まずは在任時のことも含めつつお一人ずつ、この二十年間の御感想をお聞かせいただければと思

います。

また研究面について、開設当初と比べて半分以上の先生方が退職されていらつしやいます。退職された先生方の研究分野も含めて、二十年の研究蓄積がどう評価できるのか、また今後どういった研究活動を継承していけばいいか、といったことなども話し合えればと思います。

少し堅くなりましたけれども、西岡学部長からは、あまり細かなテーマ設定をせずに、その場でいろいろと自由に意見交換ができる場になりたいというお話ですので、そういう形でできればと思っています。まずは西岡学部長いかがでしょう。



西岡和彦氏

学部草創期

西岡 実は、学部が開設された経緯を御存じなのは、現役の学部教員では石井先生、武田先生しかいらつしやらないのですよね。私も含めて大部分の先生方は学部が開設されてから教員として入れていただいているので、どういう経緯で、どういう理念のもとで文学部から独立して神道文化学部になったのか。しかも神道文化コースと宗教文化コースという文学部時代にはなかった二コース制になっている。そして、二十年がたった現在、当初の理念は果たされているのか。また、今後何が必要なのか。草創期のことを一番御存じの先生方に伺わないといけないなと思っています。

石井 もうそんな時代になったんだと。十年前の座談会では若手ではないですけども、まだ中堅だったのにとはいえながら……。学部開設に関わった、本当に草創期のことをよく御存じなのは、阪本是丸先生を中心に、あとは非常に仲のよかった岡田莊司先生です。とくに阪本先生が将来のこと、十年先のことまで考えていらつしやいました。

立ち上げのきっかけというのは、十年前の『國學院雑誌』の座談会「学部創設十年を迎えて」に書いてある通りですね。大
学百二十周年で新学部を作ることになり、様々な流れの中で長



石井研士氏

らく本学への期待が非常に強かった神道の学部を創ろうということになったのです。

学部の名称に関しては問題となりました。神社界の要望はストレートに「神道学部」だけれど、学内的には学生確保の観点から考えても難しいだろうと。そうした中で、神道文化を冠する会（現・一般財団法人神道文化会）もありましたから「神道文化学部」に落ち着きました。

二コース制にしたのは、阪本先生が十年前の座談会でおっしゃっている通りです。神道学だけだと学生が集まらないのではないかと。それから、教員に関して学内だけで集めることもなかなか難しい中、日本文化研究所の先生方に宗教に関する先

生がかなりいらつしやるので、最終的には二学科にできればという話で招聘したという経緯があります。ただ御存じのように、結果的には二学科にするにはなかなか……。これまで学部が行ってきた様々なアンケート調査を見ても、宗教学を学びたい学生を集めるのが難しい。一般教養に近い学問でもあるのではないかと私は思っているのですけれども、神道、特に歴史や古典への関心が高い学生が多かったのです。

そうした経緯で当時は、文学部神道学科は教員十名、日本文化研究所から六名をお招きして、十六名で出発をしたということです。

学部の理念は阪本先生が一番頭を悩ませて、いろいろ配慮して考えておりました。十年前の座談会を読むと、阪本先生が、当時は神道に対する風当たりが非常に強かったと。

ということ、学部は始まりましたけれども、阪本先生が神社界とも意見交換をしながら十年間をにらんで、一般入試も一定の志願者数を確保できて、ある意味、予想通りということかな。大変だったと思うのですが、順調に推移したということだと思います。

鈴木 武田先生、いかがですか。

武田 石井先生のお話を聞きながら、つい昨日のことのよう

に、いろいろなことを思い出していました。まことに万感胸に迫るものがあります。

阿部美哉先生が神道学科に着任されたのは平成六年のことでした。平成十年、上田賢治学長後任の学長選に際して、「文科省ともつながりがある阿部先生に、候補として立っていただくことはできないか」というお話がありました。

当初、阿部先生のメイソンの公約は、相模原キャンパスに実学系の「サービスマネジメント学部」を新設するというもので、神道系学部についての言及はありませんでした。けれども、学長就任以降、阿部先生ご自身が、「建学の精神」や神社界の要望、「お金もない、人もいない、場所もない」(阿部先生のお言葉)



武 田 秀 章 氏

という現状の中での実現可能性に鑑み、神道系学部の設立へとシフトしていかれたのです。

それでは、その神道系学部の内容をどのように作るのか、ということについては、学内外でいろいろな意見がありました。神道一本でいくのか、あるいはもつと幅を広げるのか、学部内でも些か意見が割れていました。神社界からの要望は、かねて「神職養成の専門学部」たる「神道学部」たるべし、ということになりました。

阪本先生ご自身は、オーソドックスな神道をベースにして、歴史や文化にも幅を広げた、広がりのある学部をつくりたい、というお考えでした。その背景には、志願者確保への配慮と共に、文科省のハードルもありました。一学科が、そのまま学部になることはできません。学科が学部になるからには、しかるべき改組理由と将来展望が不可欠です。新学部ならではの新機軸、ないしはセールスポイントを、申請書にうまく盛り込まなければなりません。そんなわけで、神道にとどまらず、歴史や文化をいかに取り込んで、いかに神道学の幅を広げてゆくか、というところに、カリキュラム設計の重きが置かれました。史学科の先生とやり取りがあったりもしました。

さらに教員定数の問題がありました。学科の教員数では、も

ちろん学部の要件を満たすことはできません。教員定数確保のため、阪本先生は、日本文化研究所の先生方に、新学部への移籍を交渉しました。それは至難を極めた交渉でしたが、最終的には移籍のご了承をいただくことができました。神道文化・宗教文化の両コースを織り込んだカリキュラム作成は、平成十二年度中に目鼻をつけ、十三年度に仕上げ、という段取りで進みました。

尚、カリキュラム作成に際しては、昼夜開講制設計の問題もありました。夜間主のみで履修が完結する仕組みを作ることも、阪本先生が苦心されたところでした。申請書作成作業の追い込みになると、終電に間に合わず、タクシー帰宅となることもしばしばでした。

学部の理念目的については、直近の自己点検・評価報告書の記載を承け、「建学の精神」すなわち「神道精神」は、「主体性を保持した謙虚さと寛容性」ということをソフトに謳いました。学部開設と併せて、同じ年に、文科省二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」が採択され、晴れて「神道・国学」の旗印を立てることができました。ここに至るまでの阪本先生や石井先生のご辛苦は、まことに語るも涙のものがあつたと思います。

鈴木 笹生先生、いかがですか。

笹生 先生方のお話されたように、本学部が新たに開設されましたが、他学部とは違った価値とは何かというと、やはり、祭りの実践を経験できるというところですね。それを体験できるのは、とても魅力的です。観月祭^①のようなほかではできない実践が神道文化学部で経験できるというところを売りにして、その経験をテコにして、地域づくりなどに食い込んでいける人材を育てていけると良いなと思います。

武田 今、観月祭のお話が出ました。石清水八幡宮の勅祭が「動く古典」と讃えられるのと同じように、本学の観月祭や成人加冠式^②は、「動く建学の精神」ともいえます。

私は学部長時代、神道文化学部のオンリーワンたる所以を、一層磨き上げたいものと願ってきました。そもそも神道文化学部は「祭」の学部です。成人加冠式、観月祭等々、四季折々、この学部ならではの年中行事が古式ゆかしく行われてきました。そうした季節の行事では、学生たちが全員参加で、出家出身であるなしの区別なく、力を合わせて盛り上がります。祇園祭で、京都の街全体が盛り上がるように、観月祭や加冠式で、学部の心意気が、スピリットが、美しく昂揚するのです。終演後の慰労会では、学生たちと、いつもしみじみと感動を共有し

ました。とりわけ観月祭では、毎回のようにつोटジェニツクな記念アルバムを作ったことも、懐かしい思い出です。

それにしても、学部開設以来、ずっと初年次の『古事記』講読担当を続けることができたのは、まことに有り難いことでした。まさに神道文化学部の学びは、天地初発の時、「あめつちのはじめの時」から始まります。授業では、学生たちに、折に触れて「語り部」の実演、「古事記アート」の制作等のワークを行って貰いました。そうした中で、次第に学生たちの名前と顔が一致するようになります。昼夜間を合わせて凡そ二百人弱の人数ですが、彼ら・彼女らが、二年から三年へ、三年から四年へ、学部の学びや神社の実習、季節の行事の運営を通して、それぞれのペースで成長してゆく姿を見守るのは、教員として本当に幸せなことでした。

別に私が何をするわけではないのですけれども、彼ら・彼女らは、自ずからこの学部ならではの特色ある学生生活を享受し、この学部ならではの和のスキル、和のこころを体得し、やがて実社会に、神社界に羽ばたいていきました。そうした各々の成長の物語を、長い目で見守ることが、私ども教員の務めでした。自らこまめに学生インタビューを行い、彼らの肉声ドキュメントを残すことにも努めました。

神道文化学部のカリキュラムでは、他の大学にはないユニークな授業が開講されています。古来のお祭りの作法、狩衣衣冠などの和の装束の着付け、伝統の雅楽や舞を身につけられる大学は、首都圏では本学以外にありません。とりわけ祭式作法は、わが国のマナーと立居振舞の精華です。学部の学生たちが、座学のみならず、高度な身体技法・複雑な組み合わせの共同作業を、日々呼吸を合わせて鍛錬していることも、実は特筆に値することなのではないでしょうか。

副学部長・学部長時代は、こうしたユニークな授業、四季折々の行事を広くアピールするのが私の仕事でした。大学ホームページやSNSでの記事アップ、パンフレット（神職用・一般用）や『神社新報』特集号（春・夏）刊行等で、学部情報の発信に只管注力させていただきました。残念ながらホームページの記事は、大学サイトのリニューアルでほとんど消えてしまいました。けれども、学部設立十五周年に際しては、フォトアルバム『神道文化学部の四季』を制作することができました。あの一冊に、学生たちと共に歩んだ歳月が、如実に刻まれていると思っています。まことに思い出のアルバムとなりました。おかげさまで教員冥利に尽きる日々を過ごすことができました。心から感謝しています。

学部開設十年から令和の時代へ

鈴木 ここまでは平成の時代です。令和になってすぐ、新型コロナウイルス感染症が世界を席巻しました。西岡先生、そのあたりはいかがでしょう。

西岡 今年度、授業時の対面試験は三年ぶりでしたが、三年生の答案に「大学へ入って初めて長文の記述式の試験をやりました」と書いてあるのです。ああ、そうか、そういう時期を送ってきたのかと改めて感じたことがありました。

恐らく彼らはいわゆるコロナ禍前の普通の学生的なことではきていないし、我々もほとんどやれなかったというのか、やっていたなかったというか……。両方だと思います。学生に何か危険があったときのことを考えると、あれこれ立ち止まってしまいうようなことになって、学生もどんどん萎縮してしまい、結局「この辺りにしましょう」というようなことで縮小した不十分なものになってしまふのです。それでも学生は文句を言わず、納得してくれています……。仕方がないのですが、今の状況下では違うこと、例えば内部に目を向けるなどして学部自体をしつかり立て直して、コロナ禍が終息したときに思い切り発揮して、新しい神道文化学部の方向性が示されればと、これはもう祈るばかりです。

鈴木 黒崎先生はいかがでしょう。

黒崎 実は学部設置準備委員会の議事録というのは、当時、学内のすべての教職員が閲覧できるように内部向けのネットに置かれていて、私は日本文化研究所から移籍することになる当事者でしたので、読んでいました。また、学部長室のロッカーに、設置準備の申請書類などが全部保管されていると思うのですが、たしか教務部委員を担当したときに、当時の岡田学部長だと思いますが、必ず読んでおくようにと言われて、目を通した覚えがあります。

そういった中で、私自身は、阪本先生から最初に電話がかかってきたときのご相談で言われましたので、周辺というか、神道文化学部設置の際にはとにかく情報化と国際化に力を入れて、先ほどの話の「広く開かれた」部分で関わってきました。

やはり十年で少しフェーズが変わったような感じがあります。平成十四年から平成二十三年くらいまでは、情報化・国際化の方途を探っていて平成十九年に神道英語というのを共通教育の中に二年次科目として設けました。それまで英語は全学必修で、特色ないものだったのを、学部独自のカリキュラムでやっていたという話になって、ノルマン・ヘイヴンズ先生を中心にやってきたのですけれども、学部教育の中にも取り入れられた。



黒 崎 浩 行 氏

それから私も主な科目は、「神社ネットワーク論」と「神道と情報化社会」、それから明階総合課程の「神道教化システム論」というのを担当してきました。その中で、例えば、情報化とか、新しい社会の中での神道や神道文化、あるいはもう少し幅広く日本人の宗教性の在り方みたいなものに目を向けていきましようといった関わり方です。

国際化であれば、今はコロナ禍で大変な状況になっていますけれども、外国から来る人たちに英語でできるような神道の伝え方を学びましょうということで、おそらく創設から十年ぐらいいまでの間に、ヘイヴンズ先生が道筋をつけました。

その方向が少し変わってきた契機が、東日本大震災です。そ

れ以前からも進行していた過疎化・少子高齢化の問題というのがますます深刻になっていって、神社界にも直結して深刻な影響をもたらしていました。

そういった中で、震災のちよつと前から、私も共同研究で関わっていた宗教の社会貢献に関するいろいろな共同研究が開始されていきましたが、先ほどお祭りの実践という話がありました。例えば、お祭りがコミュニティを活性化させたり、災害からの復興を後押ししたりする現場を見ていく中で、そういったことをもつとちゃんと教育にも還元していくべきだと思いました。学生たちが、自分が後継者としてそこに立ったときに何ができるかというところにちゃんとフィードバックしていって、それが神道の根本にもなるのだと思ったのです。しつかり有機的につながっていくようなことをもつと考えないといけないということですね。多分その一つが千度大祓³のような実践でもあり、復興というところが現代社会を変える問題に目を向けることでもあるということに結実したのかなと思いました。ただ震災から十年たったので、次の方法を考えなければいけない段階に来ているとも思っています。

開設当時から、十年経ったときからも、様々な外的要因が深刻化していて。それを受けて学部を縮小していくのは、ひよっ

としたら簡単な話なのかもしれない。我々が辞めていけば良いだけの話なので。でもそうすると本当に未来がない。どうしたらちゃんと社会に目を開きながら、神道の根本とは何かを考えられるのか。それは要するに、自分の足場を固めるということになるんだと思いますし、そこにちゃんと教育として上手くもっていけるかが、一番大きな課題かなと思っています。

石井 確かに、十年という年月は結構大きな節目だと思います。武田先生の前の話にちょっと戻りますが、私は三代目の学部長だったのですが、阪本先生もよく話していましたけれども、私が学部長になった年から十年後に十八歳人口が極端に減ることが分かっていました。たしか百二十万人を切って百万人台へ急速に落ちるので、十年後に学部がまだ存続していて、その後で維持できるためには何をすればよいかを考えておりました。

皆さんご存じのように、私は内側を見て成熟させていくタイプではなくて、自分の関心のあることをどんどん外側へ向かって開いていくというか、出していくタイプなので、まず考えたのは、学部を開いていくことだったのです。私にとっては宗教文化を開くよりは、やはり神道を開いていかなければいけないと思いました。それも外部だけでなく内部にも開いていく。それで考えたのが広報でした。

神職向けのパンフレットを作成して配りました。あれは今でも毎年つくっているのでしょうか。

西岡 毎年作成しております。

石井 大学自体もこのままだといけない、ということでも予算を認めていただき、キャッチフレーズでもって随分頑張りました。最初につくったのは「祭式の國學院」。祭式が下手だと言われていたこともあって、フレーズをつくって広げることで整備できるのではないかと考えておりました。それから二年目が「渋谷の大学」。

私のときに茂木貞純先生の発案で始まっていた観月祭を、学部行事から大学行事という位置づけに変えて広報になるようにしてもらいました。成人加冠式も全学部において他学部でも引き受ける。その代わり、各学部長に装束を着けて参列してもらいました。茂木先生に大分御苦労をかけたのですけれども……。

観月祭も同じで、各学部長のほかにも、良い機会だったのでサツポロホールディングス(株)などの本学と提携している外部機関にも声をかけました。最前列の一番良い席で装束を着て御覧になりませんか。装束を着てもらえれば理解が増すのではないかと思います。そして学内外の説得にあたったのが、大変印象深かったです。

あとは、武田先生もおっしゃったホームページですね。学部

の情報を外に出さないとダメなと思っていましたが、私の時は上手くいかなかった。武田先生がカメラを持って取材に行つてホームページに書くようになったことは大きかったですね。読んでいて面白かったです。そこまで私はできませんでした。

赤井益久学長の時に二つ目の祭式教室ができました。本当にありがたいことでした。赤井先生は、阿部学長の時に教務部長をされていて、また、安蘇谷正彦学長の時も教務部長そして、副学長もされていた。神社界の挨拶とか、出席しなくてもいいといった類のものでも「いや、出ていく」と。随分気を遣っていたかったです。たまプラーザで余っていた御扉を利用して、レイアウトは星野光樹先生を中心にまとめてもらいました。女子の着替えなど、最短距離だから非常に便利だと思っけれども、例えばあれが別々の建物にあったなら、使いにくかっただろうなという気はしますよね。

武田 同じフロアに、祭式教室が二つ揃っていなければ、成人加冠式や観月祭の規模拡大は、到底あり得ませんでした。ひとつよりふたつ。機動性が全然違います。

石井 ほかに、これは見直しも必要かと思いますが、アイスブレイクです。当時の赤井学長が導入教育の必要性を仰つていて、人間開発学部では既に始めておりました。他学部でもやっ

てくれないかというのをずっとおっしゃっていて、三年目に教員の負担を減らしながら本学部でもできないかというので、講師の先生を見つけて、それでも教員の負担は必ず増えるのですけれども、やって良いという話になりました。

今はコロナ禍でなかなかできないけれども、当初あれは面白かった。学生の評価も高かったと思います。ゲームをやるので賞品が必要だと思って、学部とあちこちのお金をかき集めて、学内のグッズもかき集めたのですよね。

武田 お土産やお菓子も用意しました。

石井 そうそう。生協に行つて、何か余っているグッズはないかとお願ひしてボールペンをもらつてくるとか。

鈴木 着任早々アイスブレイクに出たときに、学生に配る品物の多さに驚きました。あの多さもあつて学生も興奮度が高まり、入学したばかりにもかかわらず、学生同士盛り上がっていく様子は印象深かったです。

石井 私がやってきたのは情報を広げるだけ広げたということです。神社界にも一般の方々にも、そして学内にも。志願者の確保だけを考えたので、その後いかに本筋の神道を中心に締めていくのかというのは、武田先生のやってこられた通りです。

今また大きな節目だと思うので、一年、二年では済まないと思いますけれども、これから十年、二十年先、それこそ志願者動向もよく見ながら考えていかなければいけない。私が学部長になった当初分かっていたのは、とにかく神職子弟の志願者が減るだろう、それから女子学生の割合が格段に増えるだろうということです。神社界へは女子学生、特に一般の家庭の子は希望してもなかなか難しいので、どうやって就職へ導いていくかということ、いろいろな機会をつくりました。神道マインドを持った学生が社会へ出ていくというのは非常に良いことだなと思います。

笹生 今、一般家庭出身の女性でも、神社への奉職が少しずつ増えてきていますから、少し潮目が変わってきているのかもかもしれませんね。そういう人材を神社界も希望しているのだろうとは思いますが、学部としても動向を敏感に見ながら人材養成を行う必要が絶対あるでしょう。

研究の評価と情報発信の可能性

石井 人材養成の観点からみると、これからはITとか数理系が強いことも必要ですね。

笹生 国際化の問題もそうですね。留学生も少しずつ増え

ているので。

石井 さらにいえば、内容や目的が外から見えるような形にしたほうがきっと良いですね。外から見たときに、例えば「ネットワーク論」と言われると何だろうという気がするから、はつきりと分かるような形にしていこう。現代に対応しているという形にする必要があるのではないかと思いますね。

ちよっと話はそれますが、皆さんは大学のオンライン講座をご存知ですか？ オープンカレッジは対面が基調なのですけれども、オンライン講座というオンライン・オンデマンドでやる形式があつて、ああいうもので神道の講座を開けるのではないかと思います。

その場合、寄附講座にしても良いのではないかと思います。神社本庁や神社新報、日本文化交流財団などの後援や協賛をもらう形にして。日本全国どこにいてもオンデマンドで見られるので、例えば古典のシリーズとか、私は一般の神職以外の方のニーズのほうが大きいのではないかと思います。

西岡 それに近いことは、博物館でもやっていますよね。

笹生 やっていますけれども、座談会冒頭の鈴木先生からも研究の点という話がありました、ここ十年で大きく変わってきているのは、神道の今まで通説だと言われていた内容がどん



衛 生 健 氏

どん変わってきているということです。

特に岡田莊司先生が前回・前々回の大嘗祭でやられた研究というのはすごく大きくて、ある意味ではここ二十年、神道の祭祀の枠組み、特に折口・柳田論をベースにやっていた戦後の神道研究が神道文化学部ができて以降の研究の中でかなり大きく変わってきているということです。これはやはり大きな意味があつて、私も手前みそですが、その一部を考古学の研究成果などを加えて考えております。これに加えて、そもそも日本の神様はどのような存在なのか。例えば、環境との関係の中で日本の神々は古代以来どのように考えられてきたのかという問題を、最新の研究成果を総合して再構築するなどは重要な課題だ

と思います。

特に、これは黒崎先生と一緒に対談をしましたけれども、千年ぐらい前の災害や疫病の中で、今につながってくる祇園祭のような新しいお祭りができてくる。そのように神道や神祭りは、まさに社会がダメージを受けたときのレジリエンス。復元力としての機能をかなり大きく持っているのですよね。この点は、ここ十年ほどの研究の中で、かなり歴史的に明らかになっている。

それは、近世、近代に限った問題ではなく、神道・神祭りが根源的に持っている要素なのだということを、神道文化学部で明確に出していければいいなと思っています。現在、戦争が起きて疫病が流行し、大きな社会不安の時代を迎えていますね。そこで神道がどういう役割ができるのかということを、学部としてもっとアピールしていきたい。

現代社会の問題、石井先生が研究されているような社会のひずみの中での神道の意味、もしくは、黒崎先生が研究されている災害復旧の中で神道にはどういう役割があるのか、これを歴史的な流れの中でさらに現代実践と融合させて語れるのは、まさに神道文化学部だと思っています。

そのためには、この点を踏まえたカリキュラム策定と実践が、

今までの研究蓄積を受けて、神道文化学部の今後十年の戦略という形にはしないか。特に神道とレジリエンスは、やはり今後十年の大きな戦略になってくると思うので、ここを研究開発推進機構や國學院大學博物館などと連携しながら、検討していければと考えています。

石井 それはマルチチャネルで、情報と企画をつくったほうが良いと思いますね。「神道再生」「神道再興」みたいな形できちんと言文にするとか、学部の科目の中に反映させるとか、日本文化研究所の連続シンポジウムにして発信するとか。あとはやはりコントロールする人がいないとうまくいかないもので、ぜひ学部の中でコアメンバーをつくって、どういう形で情報を出していくかというのを考えたほうが良いと思いますね。

笹生 研究開発推進機構は今、神道文化学部との連携をうたっていますから、相互に、ざくばらんに話をしていくのが良いかなと思います。大学の中期五か年計画の中では、機構の研究成果を発信する軸を博物館にしようという方向を出しています。また、機構内では研究上の風通しを、もっとよくしているという話はしています。

そのときに学部との連携も一つ大きな柱にしていますので、今後さらに学部との協力関係を深めたいと思っています。デ

ジタルミュージアムを含めて、物やデジタルでの発信ができるようなツールを考えて用意していきたいと思っています。

西岡 学際的なものの橋渡しを、博物館なり、そういう中心になるところが窓口になって、他と連携しながらやるということをしていかないといけないのではないかな。一つの学部だけでは今もう限界があるので、これだけの共有財産を持っているわけですから……。

博物館が一番ノウハウを持っているわけですから、ひとりリーダーシップを取ってやるべきだろうと思います。

笹生 新学部もできましたね。

西岡 石井先生がおっしゃったのは、我々にとつてもう一度原点に戻らなければいけない大きなことばかりです。私の代は、コロナ禍で全部やらなくなった代です。私の力量がないのか、観月祭は中止もしくは縮小、成人加冠式も中止です。去年、大学側から実施してくれと言われたのですが、責任を持ってないということでお断りしました。現状で再開するならば学部だけ、他学部は神職資格課程を取っている人だけとなるでしょう。

実は前日から白衣の着方からやらなければいけないですし、コロナ禍では絶対そんなことはできません。自分たちで着てくれるなら何の問題もないですが、装束は衣紋者が着せています。

辛いところです。

ただ、実は一番実施してほしいと言ってくるのは他学部なのです。ある女子学生が「私はこのためにここに来た。大学は他にもあるが、唯一ないのはこれだ」と。まさに武田先生が言っていたオンラインワンなのです。

鈴木 こうしてお聞きしていると、石井先生や武田先生が築いてこられたものが、その後、実は大きな存在として大学に根づいていたのだということがわかりますね。

他学部の話ではないのですが、ちょうど私は「神社祭祀演習ⅢA」で四年生の女子クラスを担当しており、男性神職の衣冠と女子神職の装束を実技で著装方法を主に指導しております。



(司会) 鈴木 聡子 氏

今年度の学生は、コロナ禍により成人加冠式が中止となった世代ですが、女子神職の装束を授業で着装する時など、本当に喜んでくれました。成人加冠式の中止によって残念な思いが強かったけれど、授業で着ることが出来て良い思い出になったと。授業中ではありましたが、自身の装束の着装が出来上がると、学友とともに記念として写真を撮り合い喜び合っている姿が目に見え付いております。

他学部にとってもそうだと思いますが、それだけ成人加冠式などは学生にとつて要望の高いものなのだと、改めて感じました。

西岡 成人加冠式が終わった後はいつも写真会ですよね。結局、他学部には有職の時間はあったとしても座学の授業なのです。実際に触れられるというようなことはないわけですよ。そんなものは一生に一度あるかないかだから、写真会になるのは当然の話で、それがまさにオンラインワン教育の最たるものだろうと思うのです。

武田 オープンキャンパスで装束の着装体験を始めると、はや長蛇の行列です。

石井 加冠式と観月祭は我々にとってはキラコンテンツです。これは学部に対して提案しましたが、渋谷の再開発のできるイベント広場で観月祭ができないかと思ったのです。

例えば、今度ハチ公前広場がイベント広場になりますけれども、もしそこで観月祭をやったら、QFRONTなど四面の大きなLEDビジョンに映し出されて、海外の観光客が来ていて、ネットに乗って、ユーチューブでもインスタグラムでも何でも世界中に拡散していくことで、大学の名前というのかな、渋谷にある大学でこういうことを行っているのだと、すごい周知になるのではないかと思ったのですけれども。

黒崎 渋谷ストリームで、サイバー神社みたいなものをつくって、みんなそれをお参りするというアートイベントが令和元年に開かれていました。世間一般の関心は神道文化的なものに対してあると思います。おそらく受け入れる素地みたいなものがあるのです。

武田 先ほど笹生先生から、岡田先生が古代神道史研究、とりわけ大嘗祭研究や神社史研究を書き替えた旨のお話がありました。それは、阪本先生の近代神道史研究でも同様です。

近代の神道は、つい先頃まで「国家神道」でベタ塗りされてきました。阪本先生はそうした近代神道史をめぐる牢固たる図式を書き替えました。昨今は「国家神道」説について、多くの批判が行われるようになっていきます。一部の研究者やメディア、法曹界はともかく、少なくとも歴史学界においては、従来の「国

家神道」説はもはや通用しない状況となっています。そうした研究状況の変化は、阪本先生の一連の実証研究の然らしむところだった、と言っても、決して過言ではありません。

そもそも維新の変革自体、言わば「地方発」の変革でした。先入観をもって史料を見るから、誤った理解になります。「近代の神道」が即ち「国家神道」というルーチンな図式から離れ、近世から近代に至る神道の歴史を、その多様な史料、その多様な実態、その多様な地域性に即して明らかにしていくことが、これからの研究課題となるものと思っています。「神道史学ⅡAB」の授業では、近代神道史の刷新を期して、いつも学生たちを研究の世界に誘っています。一念発起を期待してやみません。

笹生 今は国家神道そのものの相対化が行われていますから。

武田 本学部は神道文化学部ですから、カルチャーとしての神道です。もちろん国家性というのは大切ですが、文化の幅広い裾野あってこそその国家です。まさに国の基としての神道文化を探究するのが、学部の務めではないでしょうか。

先ほど来、神道文化学部が開かれた学部になったというお話がありました。それにより、神職後継者養成の本旨が薄まっているのではないということも懸念されています。これに関し

て、阪本先生は、申請書をつくる段階から、こう仰っていました。「社家後継者養成はもちろん本務であるものの、新学部がそれだけに留まっていってはならない」と。ご参考までに、先生の次の文章をお示しします。

明治四年五月、全国の神社にも明治維新の理念である人材登用の大波が押し寄せてきました。お伊勢様から氏神様まで、全国一律に神職は「精撰補任」されることになったのです。神職を志す皆さんが社家出身であろうとなかろうと、神社の神職に相応しい有為な人材であれば登用する。神道文化学部はこの明治維新の理念を今に継承している学部なのです。(平成三十一年度学部パンフレット)

明治四年の「国家の宗祀」の精神は、御一新に伴う神社界への人材登用ということにありました。それは、従来の世襲社家とは別に、志ある者・能力ある者に、神社運営の途を開くことにありました。神道文化学部は、そうした明治の理念を引き継ぐ学部でなければならない、そうお考えになられていたのです。社家出身者に限定せず、神社や神道を支えるような若者たちを、幅広く育成する学部でなければならない、というのが、先生のお考えだったと思います。

けれども、設立から二十年が経過して、学部としての求心力、拠って立つところが弱まりつつあるとしたら、ここはやはり建学の精神に鑑み、あらためて「本に反る」「本を立てる」ことから始めなければならないでしょう。

そもそも本学の起点である皇典講究所は、皇典、すなわち皇室ゆかりの日本古典の講究を目的として開設されました。手前味噌のようですが、私自身としては、皇典の筆頭たる『古事記』を、神道精神の淵源として講読してきました。もちろん古典は文献だけではありません。皇室祭祀や神宮祭祀も、わが国の「古典」的制度です。神道の歴史とは、ある意味で、こうした「古典」再興の歴史、そのレジリエンスの歴史と見ることもできるのではないのでしょうか。

折口先生は「活かせ古典を時の勤」と歌われました。古典の根本に立ち帰りながら、現代の問題に立ち向かう。学生たちには、いつもそんなスタンスを求めています。それがうまく伝わっていないとしたら、もちろん様々な要因と背景があるとは言え、ことの元は、教員の力量、あるいは人間力が、なお及んでいない、ということになるのかもしれない。「なぜこの学部があるのか」という事柄の根本を常に省みながら、教員各自が足もとを固めてゆかなければならないと思っています。

石井 それを訴える一般書でもいいし、専門書でもいいし、出し続けてほしいと思います。こういうものが六、七本入っている本が出て「神道再興」でやったら、相当インパクトがあると思いますよね。

西岡 『プレステップ神道学』（弘文堂、プレステップシリーズ）がありますけど、要するにこれは神道文化学部がどれだけの知的財産を持っているかということであり、神道の方向性も示せる一つの場でもあるのですよね。今、改訂版を作っていきますけれど、今後神道学の一つのいい方向性になっていくのだろうと思います。

鈴木 神道というものに関しては、いろいろな分野の人も含めて広い興味・関心があるのかなというのは非常に感じています。というのも、私が令和元年に編集委員を担当した『國學院雑誌』の特集号「御代替りの歴史と伝統」は、学外からも多くの関心が寄せられ、増刷をかけるほどになりました。様々な時代の中でも現代はちょうど神道、宗教も含めてですけれども、広く受け入れられる時代に来ているのではないかという事を感じます。

西岡 他大学の先生もいらっしやいますけれども、國學院大學は平成ののち令和においても大嘗祭の特集でこれだけ分厚い

の作れるというのは非常に強みだと思いますし、こういう学術的なもの一方で広報的なものとか、一般向けにも同時並行で広げてやっていければ……。

神道に対する考え方というのは大分変わってきたと思います。我々が大学院生のときの大嘗祭といったら、神社などに火炎瓶を投げられるという時代だったのですよ。それが今回の大嘗祭はみんな喜んで、もう百八百度変わったような世の中になっているわけでしょう。神道はそれにちゃんと乗っかっていっても十分良いのではないかなと思います。だから、チャンスではないかなと思います。

笹生 細かいところまで話ができるのは國學院大學を置いてほかにないですよ。それはやはりアピールすべきなんだろうと思います。

石井 神道文化学部の責任は重いと思いますよ。学外・学内どちらにおいても。書くものはきちんと学問的な背景で、柔らかかったり堅かったりすると思いますけれども、人と組織からいっても、恐らくここが本当に信仰も含めた神道研究の中心になっていくのは間違いないので、先生方の負担は増すかもしれないけれども、やりがいのある仕事だと思いますよね。

そして黒崎先生には、もうちょっと外側で、客観的に見なが

ら支えるというのかな。学部の研究蓄積や成果などをうまく配置して使いながら、全体として広がりを持った宗教文化というものを提言できると私は思いますよね。

黒崎 最近、筑波大学名誉教授で本学兼任講師の山中弘先生が「軽い宗教」という言葉をよく使っています。いわゆる文化コンテンツの一つとしての宗教みたいな、宗教文化の消費みたいなことが、今の社会の中で浸透している捉え方で、そういう部分は確かにあるのです。もう一方で、深い信仰に根差した部分というものもあるはずで、多分両方がちゃんと分かっているという、今後いろいろな問題に的確に応えられないでしょう。

最近、宗教二世の信者の、虐待などの問題が再びクローズアップされていますけれども、そういったときに行政とか法曹関係者、社会福祉士とかソーシャルワーカーといった人たちの宗教に対する知識が浅くて、問題の深刻さにちゃんと入っていないくて、せっかく相談に来た人の悩みに応えられないということがあるという話も聞きました。

信仰とは何かということをちゃんと分かっているという、いろいろなところで問題が置き去りにされてしまうということがあると思います。それは、コロナもそうですし、災害もそうです。宗教と政治の問題もそうですし、そこら辺をちゃんと見て、考

えていく。國學院大學はそういったところにちゃんと根差している大学、そこに立脚している大学なので、それはしっかり守っていないといけないと思っています。

鈴木 ありがとうございます。お話を聞かせていただいて、学部開設時から理念というものとその後十年、そして二十年と、それぞれの時代で考えなければいけない問題点、そして今後どうしなくてはいけないかということが見えてきたのではないかと思います。

また、今ちょうどコロナ禍で規模縮小・中止しているところが多いですけれども、観月祭や成人加冠式も含めて、学内・学外に様々な情報を発信していかなければいけないというのは非常に重要なことだと思います。大学内にいるとなかなか見えにくい現場での状況というのも、神社界も含めてしっかりと意見交換をし、分かった上で、今後の学部運営をしなくてはいけない問題だと思う次第です。

また、学問的な分野でも、研究手法もかなり変わってきていて、いろいろな研究分野と神道文化学部の中にある多種多様な内容の学問分野をつなげながら研究を深め、それこそを魅力あるものとして発信をする必要があるのではないかなということを感じた次第です。

そういった意味でも、最初にお話しいただいた学部開設の理念というものを分かっているなければ、今後の十年を考えるときに方向性を見失ってしまいます。今回こういった座談会で先生方にざっくばらんにお話を聞けたというのは、非常に有意義だったのではないかと思っています。十年後にまたどういったお話が出来るかという事も含めて、楽しみたいと思っています。ありがとうございます。

(丁)

(1) 注 観月祭

供物を献じて十五夜の満月を鑑賞する「中秋観月」に由来する行事で、平成二十二年より始められた。例年、十月に行われ、多くの神道文化学部生が参加して、雅楽や舞が奉納される。

(2) 成人加冠式

奈良・平安時代の貴族社会の成人儀式に由来する行事で、平成二十年から行われている。例年、一月に行われており、色鮮やかな装束に身を包み、男子は冠、女子は釵子きしと呼ばれる装飾具を頭部に着す「加冠之儀」が中心である。

(3) 千度大祓

東日本大震災で亡くなれた方々を慰霊し、復興を祈願するため、福島県いわき市の神職と氏子総代が始めた行事で、地元や全国から参加した方々とともに大祓詞を奏上する。平成二十三年に始まり、平成

二十四年の第二回から國學院大學の学生有志が参加している。新型コロナウイルス感染症の影響での中止を乗り越え、令和四年に節目となる第十回が行われ、今後は節目の年の肅行が予定されている。

